

認定こども園の園庭における幼児の豊かな経験 —自由記述のテキスト・マイニングによる分析より—

竹田好美¹, 香曾我部琢², 石倉卓子³, 中田範子⁴

¹富山国際大学,²宮城教育大学家庭科教育講座,³富山国際大学,⁴東京家政学院大学

2018年の認定こども園の園庭に関する質問紙調査において、幼児が豊かな経験をしていると保育者が感じた遊びに対し、幼児の思いをとらえて行った援助について自由記述された105園のデータを、KH Coderにて、頻出語と共起ネットワークを用いて分析した。共起ネットワークでの分析の結果、11個のSubgraphに分けられ、「園庭における自然物を使った遊びの豊かさと遊びの広がり」、「自然素材や道具と関わる過程での対象への関わり方や操作方法への気付きと行動」、「自然物の特性や道具の扱い方に気付きながら展開される遊び」、「直接的な援助が生み出した競争的な状況において体を動かす楽しさと、魅力的な遊びと園児同士の知識や言語が促す関わり」、「多種多様な物的環境がもたらす発想や遊びの豊かさ」、「園庭で好きなだけ使える可塑性のある素材を利用した構成遊び」、「園庭が生み出すルールとその遵守」、「自然素材の様々な性質を感じられる道具や素材」、「自然物の特性の遊びへの活用」、「園庭における遊びの多様性と拡張性」、「集中力と思考力を深め、複数のストラテジーを用いて問題解決を目指す志向性」が導き出された。多次元尺度では、自然環境や固定遊具・可動遊具も含めた豊かな物的環境、教師や友達などの人的環境が豊かな遊びに関係していることが示唆された。

キーワード：認定こども園、園庭、豊かな経験、テキスト・マイニング、共起ネットワーク

1. 問題の所在

2015(平成27)年度より、子ども・子育て支援新制度が実施されて4年が経過し、2019(令和元)年10月からは幼児教育の無償化も始まった[1]。質の高い幼児期の教育・保育の総合的な提供が第一の目標に掲げられてより、現在ますますその期待は高まっている。そして、その達成の主たる手段とされているのが認定こども園の普及である。また、戸外での遊びの保障についての意識が高まっており、世界中が保育の質を重要視し、OECDも随時提言を行っている。2018(平成30)年には、「国際校庭園庭連合2018年日本大会」が開催されるなど、日本においても校庭や園庭での活動や環境を見直す潮流が本格的になってきている。

日本では、2013(平成25)年に、認定こども園を新たに作る場合には、要件を全て満たせば屋上を園庭とできるようになり、2018(平成30)年度には、園庭で十分な活動ができないおそれがある保育園等について、遠距

離にある公園まで幼児を送迎する場合に費用の一部を補助する施策が出されたりしてきたが、これらの方向性が打ち出された結果、現状の保育・幼児教育施設や、今後、新設・移行されていく認定こども園における園庭での教育・保育の質については否応なく問われる状況にあり、例えば、時々公園を利用する園、公園を日々常用する園、施設内にある園庭で継続的に遊びを繰り返す園では、環境や経験の格差が問題になることも予想される。言うまでもなく、幼児は環境との相互作用で育っていくため、この質の問題は、待機児童対策と両輪で進めていく必要があると考える。質の高い教育・保育を保障するための戸外での遊びや園庭環境を、これまでの様々な研究成果や新たな知見を得て緊急性をもって対応していく意味がここにある。

園庭の環境や戸外での幼児の経験に関する研究をみると、園庭の物理的環境が多様であれば子どもの経験も多様になる、砂場が特に多様な経験ができると推

察された大規模調査による研究や[2]、自然保育ポータルサイトでの保育者の記述を通して、不思議さや怖さなどの複雑な経験も幼児の豊かな心情を涵養するという可能性について述べた研究などがあるが[3]、園庭での遊びにおいて、幼児の豊かな経験や教育・保育の質に踏み込んだ具体的な検証はまだ少ない。

2. 研究の目的

前述した問題点を踏まえ、本研究では、園庭における幼児の遊びの豊かさを保育者がどのように認識しているのかを明らかにし、これからの保育者に求められる直接・間接的援助の方策についての検討を行うことを目的とする。

幼児期の教育・保育については、遊びが発達の基礎を培う重要な学習であること、遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されることが重要視されていることから、遊びと保育者の関係は外せない。

具体的には、認定こども園の園庭で、1年を通してみたときに、幼児が豊かな経験をしていると感じた具体的な遊びの姿を1つ記述していただくことにした。その際、保育者が幼児の思いをとらえて行った援助についても問うているが、本研究では、まず、保育者がどのような遊びに豊かな経験があると捉えているのかを、遊びの事例から分析する。「豊かな経験」の意味を言語として解釈しようとする参考になる先行研究もあるが[4]、ここでは、保育者が実践を通して感じた事例に視点を当てる。

「豊かな経験」を取り上げた理由は、将来的に、質の高い教育・保育を保障する園庭について探っていくための方法として、保育者が感じる幼児の豊かな経験を質の高い遊びと仮定して取り上げ、その実態を確認したかったからである。教育・保育要領には、「遊びを中心とする園児の主体的な活動を通して発達や学びを促す経験が得られるよう工夫をすること。特に、満3歳以上の園児同士が共に育ち、学び合いながら、豊かな

体験を積み重ねることができるよう工夫をすること」とあるが[5]、「豊かな体験」とすると、遊びの見え方に重きが置かれ、内面に関わる部分が抜け落ちることを懸念し、「豊かな経験」とした。この設問の仕方によって、保育者が幼児にとって特に望ましい経験と捉えている遊びの内容や育てたい姿が、具体的な場面として浮かび上がることを期待した。

3. 研究方法

石倉らは、全国の認定こども園 400 園に対して、2018(平成 30)年 1 月 23 日(火)～3 月 5 日(月)に質問紙調査「園庭での遊びと保育者の援助についての調査 2017」を行った[6]。返送された中での有効回答 105 園の自由記述を以下の方法で分析する。設問内容は、園庭での1年間の遊びの中で、幼児が豊かな経験をしていると感じた遊びを1つ挙げ、その遊びの具体的な姿についての自由記述である。

3.1 分析方法の選定について

研究目的に迫るために、テキスト・データを用いて、そこで用いられる語彙の特徴やその関連性から、回答者の意識や観点を統計的に分析する「KH Coder」を用いることで、保育者が認識する園庭の遊びの豊かさを統計的な視点で明らかにしようと考えた。

3.2 KH Coder 内で用いる分析方法について

KH Coder は、社会調査の分野において、テキスト型データを統計的に分析するためのソフトとして、樋口(2007)によって開発された。とくに、本研究では、(1)頻出語と(2)共起ネットワークを用いることで、保育者が園庭の豊かさを示す言葉として、どのような言葉を用いているのか、その数量とそれらの語の出現の共起の実相について明らかにしようと考えた。特に、共起ネットワークでは、出現数の多さをプロットの大きさで示し、その出現パターンの強さを線で結んだネットワークを描いた。共起ネットワークで用いた共起係数は 2.0 で設定して分析を行った。さらに、多次元尺度法において、多変

量データから距離を計算し、高次元データを低次元データにマッピングし、類似したものを見つけ出す分析法を用いた。

3.3 分析の手続きについて

本研究では、まず、自由記述について頻出語を抽出した。分析にあたっては、助詞や助動詞などの文章において当たり前に必要な語は除外するとともに、「子ども」、「幼児」、「子」、「園児」などの同じ意味を持つ語彙については、より頻度の高い語彙に集約した。また、「木」、「草」、「花」などの似たようなジャンルの語彙についても、記述の意味を吟味した上で、それらを包括するような語彙に置換した。同音異義語については、差別化を図るためにひらがなや漢字に分けて表記した。なお、「園庭」、「ままごと」、「色水」、「異年齢」、「雨樋」な

どの専門的な用語については、強制的に抽出した。

3.4 研究協力者について

近年、保育・教育施設への質問紙調査の頻度が高くなっていることから、現場の理解を得るため、一般社団法人全国認定こども園連絡協議会及び全国認定こども園協会に文書で協力依頼した上で調査を行った。現場から問い合わせがあった際に、対応していただくためである。送付先の選定については、都道府県の公式サイトに公開されている認定こども園を検索し、名簿掲載順に、また、地域や類型、設置主体が偏らないよう配慮した。都道府県園数の比率から送付数を決定して質問紙を郵送し、園の代表者に記入を依頼した。全体の送付数は、2017(平成29)年度の認定こども園数4,001の1割を目途として、400とした(表1参照)。

表1 質問紙の都道府県別送付数及び返送数

	都道府県	送付数	返送数		都道府県	送付数	返送数		都道府県	送付数	返送数		都道府県	送付数	返送数
1	北海道	22	5	13	東京都	9	2	25	滋賀県	6	2	37	香川県	3	1
2	青森県	19	9	14	神奈川県	8	1	26	京都府	4	0	38	愛媛県	5	2
3	岩手県	5	1	15	新潟県	9	2	27	大阪府	40	19	39	高知県	3	1
4	宮城県	2	2	16	富山県	7	2	28	兵庫県	31	6	40	福岡県	7	2
5	秋田県	6	3	17	石川県	11	2	29	奈良県	4	0	41	佐賀県	5	2
6	山形県	4	1	18	福井県	7	2	30	和歌山県	3	0	42	長崎県	9	2
7	福島県	6	1	19	山梨県	4	1	31	鳥取県	3	1	43	熊本県	9	2
8	茨城県	15	5	20	長野県	5	1	32	島根県	3	1	44	大分県	9	1
9	栃木県	8	2	21	岐阜県	7	2	33	岡山県	5	1	45	宮崎県	12	3
10	群馬県	13	2	22	静岡県	15	2	34	広島県	8	1	46	鹿児島県	12	4
11	埼玉県	6	3	23	愛知県	10	5	35	山口県	4	3	47	沖縄県	3	2
12	千葉県	8	3	24	三重県	2	0	36	徳島県	4	0		合計	400	115

4. 結果と考察

調査期間は、2018(平成30)年1月23日(火)～3月5日(月)、115園から返送があった(回収率28.75%)。類型の割合は、幼保連携型が約7割(84サンプル)、幼稚園型が約2割(22サンプル)、保育所型が約1割(9サンプル)、認定こども園として認定されてからの年数については、3年未満が約2割半、3～5年未満が約5割、5年以上が約2割半であった。設置主体別に

みると、学校法人が約4割半、社会福祉法人が約4割、公立が約1割半であったが、移行情報としては、「幼稚園からの移行」の割合が多く約4割半、次に「保育所からの移行」が約3割半、「保育所と幼稚園を統合」が約1割半であった。回答者は「園長」が最も多く4割以上、次に「主任」が2割半、「副園長」が約2割と続いた。また、回答のあった認定こども園すべてが同一敷地内に園庭があった。本研究の対象児は幼児だが、1号、2

号認定の在園児数をみると、「学校法人」では1号認定の園児、「社会福祉法人」では2号認定の園児が、50名以上在園している割合が高い傾向にあった。なお、幼児クラスのある階をみると、「1階」が約8割と高く、「2階」は約4割半、「3階」はごくわずかであった。

このような性格をもつ回収サンプル115のうち、園庭での遊びの自由記述が記載されていた園は105あり、それらを基に頻出語と共起ネットワークの分析を行った

結果を以下に示す。

4.1 頻出語について

頻出語については、10以上のものを以下の表に記した(表2参照)。30以上の頻出語については、「作る」「遊び」「水」「楽しむ」「園児」「園庭」「草花」「遊ぶ」の順で現れ、幼児の活動や内面については「作る」「楽しむ」「遊ぶ」、素材については「水」「草花」が豊かな経験に大きく関連する結果となった。(表2参照)。

表2 頻出語の種類と出現数(一部)

10以上の頻出語(名詞・サ変名詞・動詞・名詞C・タグ)							
作る	60	見る	32	入れる	14	団子	10
遊び	59	砂場	24	流す	14	リレー	10
水	52	泥	18	山	14	工夫	10
楽しむ	46	色水	17	実	13	発展	10
園児	44	姿	16	友達	12	掘る	10
園庭	41	使う	15	ケーキ	11	虫	10
草花	40	集める	15	一緒	11		
遊ぶ	36	砂	15	色	11		

4.2 共起ネットワーク

共起ネットワークでの分析の結果、11のSubgraphに分けられることが示された(図1参照)。なお、多次元尺度法にて分析した図は以下のものであった(図2参照)。

図1において、01は、「園庭」「草花」「水」「使う」「遊び」「楽しむ」「見る」等の言葉から構成されており、保育者は、園児が園庭で様々な遊びに取り組んでいる姿、特に、自然物を用いて遊んでいる姿を豊かな経験をしていると感じていることが示唆される。

01の中では、園庭で「草花」「実」を集めたり使ったりしながら「ままごと」で遊ぶ、「水」での「遊び」を「楽しむ」、「園庭」で他児の「姿」を「見る」という3つの繋がりに分けることができる。「ままごと」遊びの繋がりは、「草花」「実」等の自然物を集めたり使ったりしながら、「ままごと」

遊びを楽しむ様子を豊かと捉えていることが示唆される。「水」遊びの繋がりは、記述例の中に「上から水を流す」「山が崩れないように慎重に水を流す」「容器に水を入れて運ぶ」等の表現が見られ、水の特性に気付きながら遊びを展開している姿を見いだすことができる。「園庭」で「見る」という繋がりは、実際にその遊びをしていない園児も他児が遊んでいる姿を「見る」ことで刺激を受けたり、自分の遊びに取り入れたりするなど遊びを発展させていることも示されている。また、園庭での遊びでは、保育室での遊びと比較して同年齢の遊びだけではなく、異年齢の遊びも多く見たり体験したりすることができ、そのことが遊びの豊かさに繋がっていると思われる。そこで、Subgraph01を「園庭における自然物を使った遊びの豊かさと遊びの広がり」とラベル付けた。

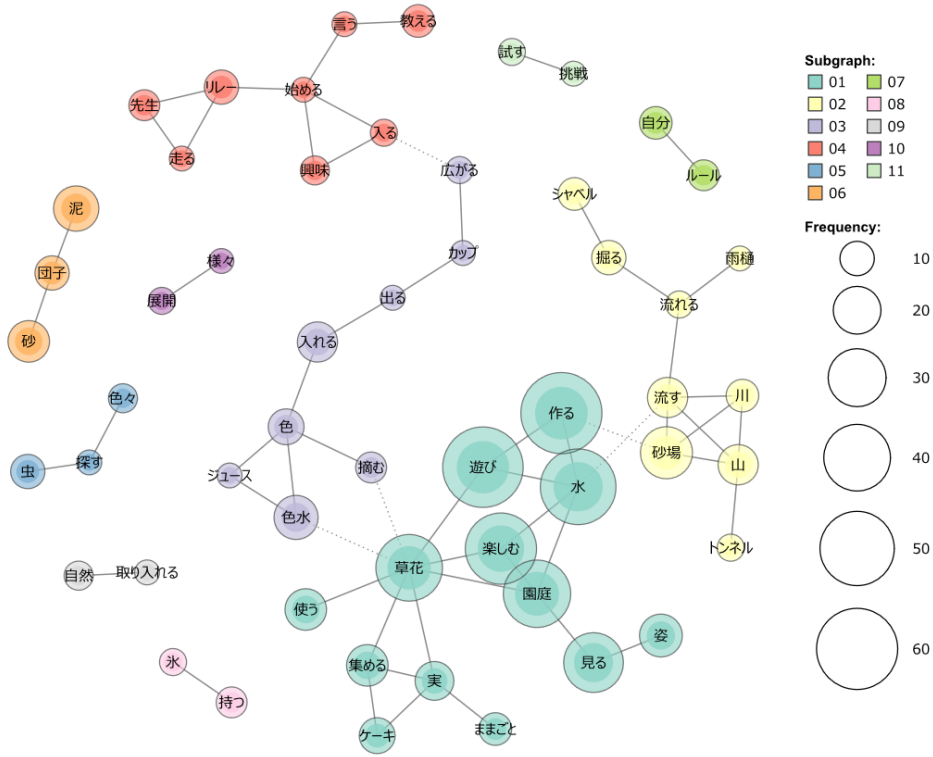


図1 保育者が捉える“園庭の遊びにおける豊かな経験”

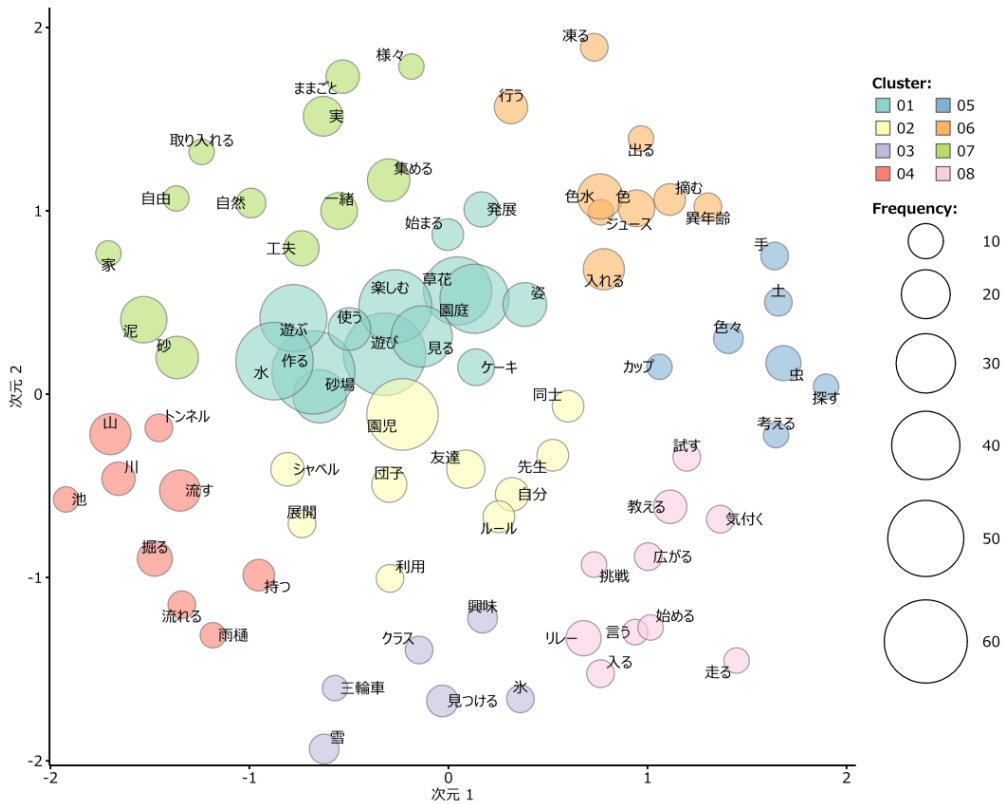


図2 保育者が捉える“園庭の遊びにおける豊かな経験”の多次元尺度

02 においては、まず、「砂場」「流す」「山」「川」「トンネル」が関連付けられている。例えば、「砂場に水を加

えて山やトンネルを作る」「山を作ったり、型押し、温泉を作ったりして」という遊びの様子から、砂場は水を流

すことができる場であり、砂場に水を加えることで可塑性が増し、山やトンネルを作ることができるという、砂の素材感を全身で感じることを示している。「トンネルが崩れないように慎重に水を流す」という記述からも、砂や水という両素材の関係性から起こる状況の変化を表しており、素材についての気付きと行動を促すことを期待する保育を意識していることが分かる。

「流れる」「掘る」「シャベル」「雨樋」で構成された部分では、例えば、「砂場で穴を掘り、水を流している」「シャベルで掘り始め、水が流れるようになった」「雨樋の段差や角度など、よく流れるように試行錯誤したり」というような記述があり、園児が道具を使って自分の思い描く状況へと段階的に、また、主体的に考えて取り組む過程について細やかに描写されていることから、保育者が、対象と関わる過程に対する行動や気付きに対して、遊びの豊かさを感じ取っていることがうかがえる。そこで、Subgraph02 は『自然素材や道具と関わる過程での対象への関わり方や操作方法への気付きと行動』とラベル付けした。

03 は、まず、「色水」「ジュース」「色」の3つの語が相互に関連付いている。例えば、自然物を使って「色水」を作りながら、様々な「色」が出ることや「色」の濃さが変化することに気付きながら、その多様な色が出る「色水」を用いて「ジュース」屋さんに遊びを発展させていることが示されている。さらに、「入れる」「出る」「カップ」「広がる」と言葉が繋がっていることから、「色水」遊びを中心にしながら道具の扱い方を知ったり、興味を広げたりしながら遊んでいることも示唆される。そこで、Subgraph03 を「自然物の特性や道具の扱い方に気付きながら展開される遊び」とラベル付けした。

04 は、まず、「先生」と「リレー」、「走る」が3つの語が相互に関連付いており、「先生の直接的な援助によってリレー遊びによって走ることを楽しむ様子」を、豊かな園庭の遊びとして保育者が認識していることが示唆された。例えば、「先生がトラックを描くと」、「先生と園児

が共にかかわって走る」と先生の援助の重要性が示され、さらに、「リレー遊び」において「走る楽しさを感じていた」、「園庭の真ん中で走り始め」などと、リレーという状況が幼児の走る行為に対する意欲を高めていることが書かれていた。そして、そこに、「教える」「言う」「始める」「入る」「興味」が関連付いており、園児同士で知らない知識を「教える」「教えてもらう」「教え合う」ことで遊びに興味を持ち、「4歳児も入って一緒に遊んだり」、「やりたい」「決めよう」と言う園児の姿が表れている。これらは、遊びに入っていく手順や過程を描いていると思われる。この関連性から、園庭での様々な遊びを通して、人との関わりを期待する保育者の思いが伝わる。なお、これらの記述には異年齢の関わりも見られることから、園児同士の縦横の関わり合いが見られる遊びを、保育者が「豊か」と捉えている様子が見受けられる。そこで、Subgraph04 は、『直接的な援助が生み出した競争的な状況において体を動かす楽しさと、魅力的な遊びと園児同士の知識や言語が促す関わり』とラベル付けした。

05 は、「色々」、「虫」、「探す」が関連付けられているが、園庭での遊びの中で、「探す」対象として虫が多く挙げられている。また、「虫探し」が「色々な遊び」の一つとして挙げられている。その他、「色々な土」「色々な形」「色々な場」「色々な発想」というように、「色々」な素材や形状、空間のある園庭から、「色々」な内面の変化が生まれることを示唆している。そこで、Subgraph05 を『多種多様な物的環境がもたらす発想や遊びの豊かさ』とラベル付けした。

06 は、「泥」、「団子」、「砂」が関連づけられ、保育者は、「園庭の泥や砂でつくる泥団子で遊ぶ姿」を通して豊かな経験をしていると認識していることが示された。「泥団子を作る」、「土山の砂が流れ、その砂を集めて団子を作る」などと、園庭にふんだんにある泥や砂といった可塑性のある素材を使ってものを構成する姿が記述されている。そこで、Subgraph06 を『園庭で好きな

だけ使える可塑性のある素材を利用した構成遊び』とラベル付けした。

07 は、「ルール」と「自分」によって構成され、保育者が「園庭における遊びにはルールが求められ、それを自ら遵守する道德性の高さ」が認識できることを示している。例えば、「ルールを変えながら」、「ルールのある鬼ごっこ」などでは、ルールが必要になる遊びが園庭で展開していることが示されている。また、「自分達から仲間を増やししながら」、「自分達なりのルールを決め」などと、活動におけるルールを自分から遵守する姿が述べられている。そこで、Subgraph07 のラベルは『園庭が生み出すルールとその遵守』とした。

08 は、「氷」と「持つ」が関連付けられ、シャベルや型、枝や草花や小石、トレーを持ってきてかき氷屋さんや氷作りを楽しむ様子が記載されている。そこで、Subgraph08 のラベルは『自然素材の様々な性質を感じられる道具や素材』とした。

09 は、「自然」、「取り入れる」が関連付けられ、草花などの自然物を遊びに取り入れている姿が示された。例えば、「どんぐりの実や草花を使ってケーキ屋さんを楽しむ」、「ケーキや家のごはんなど色々なものに見立て、飾りつけに使う」等、自然物の特徴を捉えて本物らしく飾り付けて楽しむ姿と記述している。そこで、Subgraph09 を『自然物の特性の遊びへの活用』とラベルづけした。

10 は、「様々」と「展開」が関連付けられ、「園庭で繰り広げられる遊びには多様性が存在し、その遊びの展開し易さ」を保育者が強く「園庭の遊びの豊かさ」と関連付けて認識していることが示された。例えば、「様々な工夫」、「様々な遊び」、「様々な展開」などの記述からは、遊びの多様性が理解できる。また、「発展、展開を楽しんでいる」、「毎日様々な展開が見られている」などからは遊びが広がっていく様相を保育者が認識していることが分かる。そこで、Subgraph10 を『園庭における遊びの多様性と拡張性』とラベルづけした。

11 では、「挑戦」と「試す」が関連付けられており、「遊びの過程で創意工夫をしながら、そこで出会ったさまざまな困難に挑んでいく姿」を園庭の遊びの豊かさとして意味づけていることが明らかにされた。例えば、「じっくり試している姿」や「どうしたらうまくできるのか試したりしながら」などと、遊びに集中し、思考を深めている姿が記述されている。また、「できることをまねて挑戦してみる」、「何度も挑戦していた」などと、模倣や繰り返すなど複数のストラテジーを試行する姿が示されている。そこで、Subgraph11 のラベルは、『集中力と思考力を深め、複数のストラテジーを用いて問題解決を目指す志向性』とした。

次に、保育者が捉える「園庭の遊びにおける豊かな経験」の多次元尺度(図 2)をみると、「園庭にある自然素材を使って遊びを楽しむ姿」が中心概念にあり、「遊び」「楽しむ」「使う」「水」「砂場」「草花」など、頻出語の多い語が関連して位置している。Y 軸の上部は「集める」「摘む」「工夫する」など、どちらかといえば個々で集中して遊ぶ姿が、下部は「リレー」「教える」「広がる」など友達先生と一緒に遊ぶ姿が多くあげられ、人的環境としての遊び集団のサイズとして意味づけられる。また、X 軸の左側は園庭の「砂場」や「家」などの固定された場にある物(「砂」「泥」「トンネル」など)を使って遊ぶ姿、右側は移動できる物(「カップ」「虫」など)で遊ぶ姿が多くあげられ、遊びの要因として園庭にある物的環境の固定・可動として意味づけられる。幼児が豊かに遊んでいると捉えられる姿は多様にあるが、自然物を好きなだけ使えること、固定遊具や可動遊具が環境として準備されていること、そして、個々が集中できる場と集団として遊びを広げる場があることが必要であると読み取ることができる。

5. 総合考察

本章では、示された Subgraph01-11 のラベルと、多次元尺度の分析結果を基に、保育者が捉える園庭に

における遊びの経験の豊かさについてまとめ、保育者に求められる直接・間接的援助の方策について大まかな検討を行う。

「幼児が豊かな経験をしていると感じた遊びの具体的な姿」の自由記述を頻出語や共起ネットワークから分析したが、ラベリングした結果を再度まとめると、「園庭における自然物を使った遊びの豊かさと遊びの広がり」、「自然素材や道具と関わる過程での対象への関わり方や操作方法への気付きと行動」、「自然物の特性や道具の扱い方に気付きながら展開される遊び」、「直接的な援助が生み出した競争的な状況において体を動かす楽しさと、魅力的な遊びと園児同士の知識や言語が促す関わり」、「多種多様な物的環境がもたらす発想や遊びの豊かさ」、「園庭で好きなだけ使える可塑性のある素材を利用した構成遊び」、「園庭が生み出すルールとその遵守」、「自然素材の様々な性質を感じられる道具や素材」、「自然物の特性の遊びへの活用」、「園庭における遊びの多様性と拡張性」、「集中力と思考力を深め、複数のストラテジーを用いて問題解決を目指す志向性」となる。

実際の豊かな遊びを想定した具体的な姿のまとめを試みると、幼児は園庭にある砂、水、草花、実などの自然物を中心とした様々な素材に十分に触れ様々なことに気付いている、自然物の特性を活かした遊びを通して道具の扱い方を熟知しさらに遊びが発展・拡張している、園児同士で工夫したり話し合ったりしながら遊びを豊かにし、時にはリレー遊びなどで競争したりしながらルールに気づき遵守しようとしている、園庭での遊びが幼児の知識を豊かにしたり集中力や思考力を深め問題解決能力を高めている、ということになる。

多次元尺度の分析も踏まえると、保育者に求められる直接・間接的援助の方策については、園庭における道具、素材、物理的な環境構成の準備、園庭における人的環境への配慮や互恵性、思考力が高まるような保育者の環境を通じた仕掛けなどが必要であることが考え

られる。

以上のように、園庭での遊びについて分析を行ってきたが、本研究で分析した自由記述は、あくまでも一園一事例のため、園庭環境や季節の要因などについての偏りも考えられる。また、事例にも保育者の思いや意識などの保育観も反映されている可能性が大きく、園庭での保育の質を問う場合に、その保育観が明らかになるような質問のあり方も含めて今後検討していく必要があるだろう。

認定こども園の眼目は、「遊びを中心とした豊かな生活」「環境を通じた教育及び保育」である。教育・保育の質は、遊びの質とも言えるだろう。本研究の結果が、と、近い将来、遊びの質を保障する園庭での教育・保育を自己評価できるような試案作成につながるよう努めたい。

6. 参考文献

- [1] 内閣府:幼児教育・保育の無償化, (2019)
- [2] 発達保育実践政策学センター:園庭に関する調査保育・幼児教育施設の園庭に関する調査報告,東京大学, (2018)
- [3] 茶谷智之:自然環境と幼児理解の視座－自然保育ポータルサイトの実践例の分析から－, 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要.第4号.21, pp.21-32 (2017)
- [4] 呉羽 真:経験の豊かさは何によって測られるべきか?－「大いなる錯覚」を巡る議論の含意－, 京都大学哲学論叢刊行会, 哲学論叢, 36, pp.92-102, (2009)
- [5] 幼保連携型認定こども園教育・保育要領:第3節幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項.3 環境を通して行う教育及び保育, pp.126 (2018)
- [6] 石倉卓子・竹田好美・神長美津子・宮里暁美・建部謙治・田尻由美子:「認定こども園における

遊びの質を保障する園庭環境評価規準(幼児版)の試案作成」研究成果(一部公開):科学研究費助成事業 基盤 C[15K01778]